



ロバの子

- ✎ Lindiwe Matshikiza
- 👤 Meghan Judge
- 💬 Yuka Makari
- 🗣️ japanska
- 📊 nivå 3





ある日のことです。小さい女の子が遠くのほうに不思議な形をしたものを見つけました。



その形が近づいてきたとき、女の子は大きなお腹をした妊婦さんだと気が付きました。



その女の子は恥ずかしがりやでしたが、勇気を出して妊婦さんに近づきました。女の子や女の子の家族たちは、その妊婦さんをしっかり守ることに決めました。



赤ちゃんは今にも生まれそうです。みんなが彼女を助けました。「押すんだ!」「毛布をもってきて!」「水をちょうだい!」「押してー! ! !」



しかし、赤ちゃんが出てきたとき、彼らは驚き飛び跳ねました。「ロバ?！」



みんなは「私たちは彼女のことも赤ちゃんも守ろうと決めて手助けをしたけど、彼らは私たちに悪い運をもってくるに違いない」と言い始めました。



彼女はまた一人ぼっちになってしまいました。彼女は
このかわいそうな赤ちゃんをどうやって育てればいい
か、自分はどうするべきか、わかりませんでした。



しかし、彼女は、ロバが自分の子どもであり、自分はロバの母親であることを受け入れなければなりませんでした。



その子どもが小さいサイズのままであれば、すべては違っていたでしょう。しかし、そのうちにその子どもは彼女がおんぶできないくらい大きくなってしまったのです。そしてその子はどんなにがんばっても人間と同じ行動ができるようにはなりませんでした。母親は疲れ、イライラして、自分の子どもを動物に接するように扱いました。



その怒りやストレスはロバの中にどんどんたまっていきました。ロバは人間と同じことはできないし、人間のようにはなれない。たまりにたまった怒りから、ついにロバはお母さんを蹴ってしまいました。



ロバは自分のしたことに対し恥ずかしい気持ちでいっぱいになり、精一杯の速さでその場から走り去ってしまいました。



気がつくあたりはすっかり夜になり、ロバは道に迷ってしまいました。「ヒヒーン……」彼は暗闇のなかささやきました。「ヒヒーン……」それは後ろにこだましただけでした。彼はひとりぼっちでまるくなり、深い、悲しいねむりにつきました。



ロバが起きたとき、そこには知らないおじいさんがロバをじっと見つめて立っていました。すると、おじいさんの瞳の中に小さな希望の光をみつけたのです。



おじいさんはロバに生き抜くためのたくさんの方法を教えてくれました。彼はその教えをよく聞き、学びました。彼らはお互いに助け合い、笑いあって時を過ごしたのです。



ある朝、おじいさんはロバにのり、山のとっぺんにつれていくようお願いをしました。



彼らは雲の上で眠りに落ち、ロバはお母さんが病気になり、自分のことを呼んでいる夢をみました。



ロバが起きたときには、雲も、親愛なるおじいさんも消えてなくなっていました。



ロバはついに自分がどうするべきかがわかりました。



ロバは、息子を失って悲しみにくれていたお母さんを見つけられました。彼らはお互いに長く見つめあい、そして強く強く喜び、抱きしめあいました。



ロバと彼のお母さんは一緒に成長し、暮らしていく方法をたくさん見つけていきました。ゆっくりではあるけれど、周りの家族も徐々に彼らのことを受け入れていきました。



Sagor för barn på svenska

berattelser.se

ロバの子

Skriven av: Lindiwe Matshikiza

Illustrerad av: Meghan Judge

Översatt av: Yuka Makari

Denna saga kommer från African Storybook (africanstorybook.org) och vidarebefordras av Sagor för barn på svenska (<https://berattelser.se/>), som erbjuder sagor på många språk som talas i Sverige.

Detta verk är licensierat under en Creative Commons

[Erkännande 4.0 Internasjonal Lisens](https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).